

第11回 北海道プライマリ・ケアフォーラム開催報告

2024年11月16日（土）、第11回北海道プライマリ・ケアフォーラム、および日本プライマリ・ケア連合学会北海道ブロック支部第8回学術集会（兼 第103回北海道医学大会プライマリ・ケア分科会）が、「かでの2・7」で開催されました。今年も6つのワークショップ、学術集会、学生並行企画、基調講演を行いました。ワークショップのテーマは多岐に渡り、どれもとても興味深い内容でした。医療とは少し離れたところにあるように見える「デザイン」の視点、近年注目を集めるLGBTQ、クラシカルなテーマの中でも臨床推論でのAI模擬患者の登場や、EBMのStep4に着目した考え方、進化し続ける嚥下の話題、臨床倫理士からのアドバイスなど多くの人に楽しんでいただけた内容になっていました。基調講演を聞き「自分にできることについて考えさせられた」という感想もいただきました。来年も多くの方に楽しんでいけるようなフォーラムにしていければ、と思っています。来年は11月15日（土）に開催します。ご参加をお待ちしています。

各担当者から開催後のコメント頂きました！

・嚥下：小山

『いつまでも美味しく食べ続ける』ために医療者に出来ること～嚥下に対するリハビリ、栄養、口腔ケアを中心に～

多職種から嚥下について学ぶ企画を実施しました。前半は管理栄養士の岡澤先生、言語聴覚士の中川先生から食形態の知識を学びつつ、とろみ飲料、様々な味・硬さの嚥下調整食の試食会を開催しました。後半は、歯科医師の濱田先生に歯科訪問診療の現場を紹介していただき、理想通りにはいかないモヤモヤ感を共有していただきました。実際に嚥下食を食べたり、現場の実体験を聞いたりしたのが学びになったとの声を多数いただきました。



・地域デザイン：阿部

医療とデザイン ～パーソナル空間からソーシャルデザインまで～

山田先生、松浦先生、田邊先生から、パーソナル空間からソーシャルデザインまで様々な広さと視点のレクチャーをいただきました。グループワークでは多職種ごちゃ混ぜでそれぞれ困りごとを出してもらい、講師の先生方と一緒にデザインでの解決法を考えました。図面を書いてみるグループもあれば、様々な人が集うコミュニティデザインを考えるグループなど見られ、活発なアイデア交流の場となりました。

・臨床推論：西村

生成AIによる模擬患者を活用した臨床推論を行った。症状を学習させ、実際の患者のように振る舞わせることで、必要な情報以外にノイズとなるような情報も参加者に与えることができました。今までのPowerPointによるプレゼンテーションとは違い、実際に対話形式（生に近い形）で臨床推論を行うことができたため、大変好評でした。会話のログも文字として残ったため、参加者の思考を後追いしやすく、ディスカッションが大いに盛り上がりました。

発行人

支部長 木佐 健悟 北海道ブロック支部事務局（市立美唄病院内）

TEL:0126-63-4171

mail:hpca.jimukyoku@gmail.com

・LGBTQ：霜田

医療現場におけるLGBTQ当事者とのコミュニケーション入門 ～公正なヘルスケアを提供するため～

勤医協札幌病院産婦人科の小内先生、Queer Life Projectの工藤さんをはじめ当事者の方をお招きし、LGBTQの基礎知識のレクチャーと2つの事例のグループワークを行いました。当事者も受診しやすい病院作りやコミュニケーション法、当事者と非当事者で享受できる制度や権利の違いを学び、参加者からは日常生活でもコミュニケーションに気を付けたい、知識を深め院内でも共有したいといった感想がありました。

・臨床倫理：石谷

立ち止まり、みんなで考える臨床推論

函館稜北病院 総合診療科の川口先生にご講演頂きました。前半では日常の臨床において「もやもや」を感じたら立ち止まることの重要性、倫理とは何か、カンファレンスでの注意点などの講義を、後半では実際の症例について「倫理Webカンファレンス」を疑似体験する形でグループディスカッションを行い、悩ましい状況に陥った時にどう考えるか？どう行動するか？について、臨床倫理士のコメントを基に振り返ることで学ぶことが出来ました。

・EBM：井上

EBMの実践 ～他職種でStep4（患者への適用）を考えよう～

EBM（Evidence-Based Medicine）のStep 4（患者への適用）に重点を置いたワークショップを行いました。医師、看護師、薬剤師、管理栄養士等と幅広い職種の参加者と共に、実際の症例を用いたグループワークを通してEBMを実践。参加者からは『エビデンスは4要素のうちの1つだとわかった』『実践のハードルが下がった』と感想があり、EBMのイメージを変えるきっかけとなることができました。



・学生企画：宇高

学術集会並行企画

他大学の学生が交流を深める場として「コミュニケーションスキル」をテーマにした企画を実施しました。最初に対話のフレームワークを学び、聞き手は「質問をし続ける」ことを意識したグループワークを行いました。異なる背景を持つ学生同士でしたが、相手に関心を持ちながら会話を進めることができ、活発な時間となりました。また現場で働く医師との交流もよい刺激になったようで、学生の視野を広げることができました。

・学術集会：埜田

学術集会では、一般演題1と2で各6例の症例発表が行われ、学生から専攻医まで幅広い年次の発表者が参加しました。家庭医療学の視点から症例を振り返り行った介入やサナダムシへの対応など、多彩な内容が発表され、大変学びの多い充実した集会となりました。多くの知見を得るとともに、臨床現場での実践に活かせる有意義な時間を過ごすことができました。

・基調講演：渡邊

この場所で私たちにできること

更別町のコミュニティーナースである稲本さん、今村さん、西上さんからは更別での地域での活動についてお話しいただき、ささえる研究所理事長の永森さんからは半径5mをHappyにすることについてお話しいただきました。4人のお話を通して、地道に地域の人と関わることで地域に必要なことを引き出す方法のヒントを得たり、身近な人を幸せにすることがその地域の幸せを広げていくことについて実感するお話を聞くことができました。

2024年10月サイトビジットご報告

2024年10月25日に木佐支部長と若手医師学生支援委員会の委員で深川市立病院に伺い、サイトビジットとポートフォリオ検討会を行いました。サイトビジットでは、プログラム責任者の嶋田英資先生からプログラム内容についてのプレゼンテーションと院内の案内をして頂きました。総合診療医としての専門性だけではなく、消化器内視鏡の専門性を身につけること、そして多職種連携や複数診療科をまとめる力を身につけることがプログラムの目標で、それを獲得できる研修環境であることが伝わってきました。ポートフォリオ検討会では、深川市立病院の松田伊織先生から患者中心の医療の方法を実践した事例、釧路協立病院の渡邊由桂先生から障害とリハビリテーションの事例についてプレゼンテーションを頂きました。いずれも複雑な事例でしたが、枠組みを使いながら前に進んでいけたことがわかる発表でした。その後懇親会も開いて頂き、研修内容に加えて雰囲気によさも専攻医が集まっている理由であると感じました。

お忙しい中サイトビジットをお引き受け頂いた深川市立病院のみなさんに、この場を借りてお礼申し上げます。若手医師学生支援委員会では、1年に1回道内の総合診療研修プログラムを持つ病院にサイトビジットとして伺い、交流させて頂いております。今後皆様の施設にも伺う相談をさせて頂くことがあるかと思しますので、その際はどうぞよろしくお願い致します。

若手医師学生支援委員会 委員長

釧路協立病院 内科/総合診療科 加藤聡一郎



リレーコラム

毎月、北海道ブロック支部でさまざまなキャリアで活躍されている方たちに気ままだに日常をつづってもらっています。

みなさん、こんにちは。曳田彩子と申します。10年ほど前に松前町立松前病院で後期研修をさせてもらったときに家庭医療専門医をとりました。しかしそれ以来、気の向くままに津々浦々と働いてきましたので、地域に根ざした家庭医らしい事は殆どやっていません。なので私の書くことは少し場違いの様な気がしますが、最近感じたことを下に記します。

1年ほど前に、国境なき医師団からの派遣でパレスチナの西岸地区で働きました。ニュースでよく見るガザ地区と比べたらまだ生活感がありましたが、それでも常に死と隣り合わせで生きる人々の目の色は沈んでいました。私はパレスチナ人のスタッフと共に、砂漠や草原にぽつんと立ついくつかの移動診療所に出向いてはプライマリケアを提供していました。風邪やら高血圧やら水虫やらを診ていましたが、一番大事なのは誰かがきちんと毎週そこに現れて診療することでした。彼らが見捨てられていない事を伝えるのが大事でした。

もっとも印象に残ったのは、パレスチナの人たちの土地への思いです。私がいた頃はイスラエルとの緊張が高まっていた時期でしたので、西岸地区の色々なところで、イスラエル人によるパレスチナ人の殺戮や住居の破壊が起きていました。家族で5年かけて、やっと作り上げた2階建ての素敵な家を重機で一晩にして瓦礫にされてしまったパレスチナ人がいました。彼はとても悲しそうでしたが、明日から又同じ場所に家を作り始めると言っていました。パレスチナはHoly landだからです。



確かにパレスチナは気候がよく、可憐な花が咲き乱れ、食べ物が美味しい素晴らしい土地でしたが、もし私が彼の立場であれば一目散に逃げ出すと思います。私自身、生まれた土地にあまりこだわりが無い人間なので、この困難な状況で敢えてパレスチナで暮らすことを選んだ人たちの覚悟は、なかなか想像も難しいのですが、尊重したいと思いました。

きっと宗教観とか、家族構造とか、戦争の歴史とか、色んな事が影響して人間の価値観をつくるのだらうなと思いました。

私は根無し草のように暮らしており、飽きたらすぐに違う場所に移動してしまうので、人の役に立つ事はあまり無いのですが、色々な考え方の人の言葉を聞いて、視野を広く持ちたいです。戦争を終わらせることはできなくても、目の前の人の話をきちんと聞くことはせめてしようと思っています。

その他のお知らせ

【皆さんの北海道お勧めグルメを教えてください！】

来年6月に北海道で開催される第16回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会、実行委員おもてなしチームよりお願いです！おもてなしチームでは、道外からお越しになる参加者へのおもてなしの取り組みとして『北海道「そこ・そこ」お勧めグルメガイド』を作成することとしました。

そこで、北海道ブロック支部会員の皆様から、北海道各地の選りすぐり絶品グルメ情報を募集いたします。札幌に限らず道内あちこちのお勧めのお店、皆様の行きつけのお店、道外からのお客さんを必ず連れて行くお店、飲食店に限らずお土産情報等、ぜひ様々な情報をお寄せください。

投稿は2024年11月18日に配信された北海道支部のメーリングリストに記載のURLよりお願い致します。(不明の場合は担当者にお問い合わせいただければお送りします。)

締切は2025年1月31日とさせていただきます。

たくさんの情報、お待ちしております！

※スペース等の関係でお寄せいただいた情報全てが掲載できないこと、また情報を一部変更させていただく場合があります。

担当者

JPCA2025実行委員会

交流企画リーダー 山口章江

おもてなしチーム担当 木佐優葉 yuhakisa@gmail.com

北海道ブロック支部 広報委員会 編集後記

今回ニュースレターを担当した加藤利佳(手稲家庭医療クリニック/札幌刑務支所矯正医官)です。

10月に育児休業から復帰し、次々と家族内で感染症が流行し、月の半分かくらい仕事ができない状況が続きました。保育園の洗礼を浴びています。なんとか生き延びたい今日この頃です。
